# 塾で人生決まる？



2月1日、首都圏の中学受験はピークを迎える。少子化にもかかわらず、過熱気味の受験競争。その一端を担う進学塾は、子どもたちや親を「能力主義」へと追い立てる権化なのか。

## 将来案じて 親がはまる穴

2006年小説家デビュー。「君たちは今が世界」は20年、開成など多数の中学入試で出題。近著は「翼の翼」。

**朝比奈あすかさん　作家**

昨年執筆した小説「翼の翼」は、中学受験に過熱していく親を描いたものです。小説なので強調した部分はあるものの、ストーリーの元は、私自身が我が子の受験に際して抱いた感情です。

就活や仕事でうまくいかずに悩んでも、何とか折り合いを付けてきた私にとって、子どもの中学受験は初めて経験した「ままならないもの」でした。中高一貫校で伸び伸び過ごさせてあげたい。趣味をいかせる部活動がある学校を探したい。子どものためにと始めた受験勉強だったのに、気づけば、親が焦りや不安を一方的に募らせていました。

私もそうでしたが、受験勉強の期間中、親は視野が極端に狭くなりがちです。そんな「穴にはまって」しまうのは、進学塾を中心とするいまの受験システムの影響が大きいと思います。範囲の広さや特殊な算数問題を考えると、現在の中学受験は塾なしではとても太刀打ちできません。

テストの点数、順位、偏差値、推移のグラフ……。塾はこうした複数の数値を用いて「子どもの位置」を可視化します。また、有名校の合格者数が企業業績に直結するためかもしれませんが、塾は「その成績なら狙える」と難関校名を冠したコースを示して、受験家族をあおる。目先の成績に一喜一憂し、子どもを追い立ててしまう親は少なくないでしょう。

とはいえ塾を否定するつもりはありません。塾の授業や仲間から良い刺激を受けている子もいます。実際、塾の先生は子どもをひきつける授業をしてくれるので、勉強ってこんなに面白いんだと知る子も多い。問題は、親が目の前の子どもをちゃんと見ているか、ではないでしょうか。

今の親世代は就職氷河期を経験し、将来への確信を持てない時代を生きてきました。せめて子どもには、少しでも選択肢を手にできる土台を与えたいという切実さがある。限られた時期に、道を外させず、ワンチャンスを逃さず。そんな親の行動が格差社会につながり、さらに親の焦りや過熱を生む――という悪循環が起きていると感じます。

でも、子の将来を案じる親心は、実は子どもの力を信じていないのではないか。「翼」を書きながら、そう気づきました。「子どもは未来を選ぶ力がないから」。そんな親の思い込みが、子どもの手を引っぱってしまう。本当は子どもは色んな方角へ羽ばたく翼を持っているのに。

中学受験を描く漫画「二月の勝者」はドラマ化もされましたが、とてもいいタイトルです。2月に合格を勝ちとっても、それは「人生の勝者」になったということではない。親は、中学受験は「人生の通過点に過ぎない」と俯瞰し、どんな結果でも、子どもを信じて見守ってほしいと思います。（聞き手・藤田さつき）

## 教育＝地位獲得、の根深さ

1973年生まれ。教育ジャーナリスト。「ルポ塾歴社会」「中学受験『必笑法』」など著書70冊以上。

**おおたとしまさ さん　教育ジャーナリスト**

首都圏の中学受験では「サピックス」という塾が難関校の合格者で圧倒的なシェアを持っており、一強時代となっています。開成など最難関中高一貫校に合格すると、今度は「鉄緑会」という塾から「次は東大!!」というちらしが配られ、首都圏トップ校のかなりの割合の生徒が通塾しています。

中学受験が終わった瞬間から大学受験に向けて塾通いが始まる。公教育で最上位層向けのエリート教育をしていない分、塾で同レベルの子たちと切磋琢磨しているのです。

日本でこれほど塾が存在感を持っているのは、教育制度が平等性を重視しているからです。学習指導要領に沿った教育が行われ、検定教科書をベースに入学試験の範囲が決まる。透明性が高いので、どうアプローチすれば合格できるのかというメソッドを、塾が提供できます。

与えられたものを疑わずに大量にこなした子が合格を勝ち取る。まるで大食い競争です。テーマパークのファストパスにも似て、学歴ならぬ塾歴社会と言える状況です。

塾は、受験競争を激しくしていると犯人扱いされることがあります。しかし、これだけ多くの家庭が上を目指すのは、日本の学歴偏重主義が根底にあるからです。地位達成の手段としての教育という土壌があり、受験競争がある。そもそも偏差値で表される学力によって社会的地位が決められてしまう社会構造が、根本的な問題だと思います。

塾を巡っては、地域や所得による教育格差も問題となっています。教育は個人のためだけにあるわけではないのに、「頑張った自分は教育で得たものを独り占めしていい」と考えている人も多い。

この勘違いを払拭しなければ、「一部の人だけ塾に通えるのは不公平」という批判に反論できません。恵まれた環境で得たものを世の中に還元する、という価値観を親も子も持って欲しいと思います。

また、誰もが大量の学習をこなせるとは限りません。トップ校に入れたいという親の気持ちは理解できますが、それが我が子を追い詰めるリスクを忘れてはいけません。

受験システムに過剰適応し、子どもを「勝ち組」にしようと視野が狭まる多くの保護者を私は見てきました。大学入学共通テストの初日、東大の前で凶行に及んだ高校生の事件も起きました。「トップじゃなければ人生おしまい」という恐怖心に追われて生きるのは苦しいでしょう。

偏差値がちゃや10違っても人生に影響はない、と我が子に言ってあげましょう。子どもの肩に乗りきらないものを無理に背負わせるのではなく、過剰な競争には付き合わないという防御役を担うべきです。子どもを守ってあげられるのは、保護者だけなのですから。（聞き手・真鍋弘樹）

イラスト・齋藤　菜穂

## 実体もたない「塾歴社会」

1977年生まれ。専門は教育の歴史社会学。著書に「『地方』と『努力』の現代史」など。

**石岡学さん　京都大学准教授**

大人も解けないような難問を、子どもが解けるようにすべく進学塾に通わせて、膨大な時間をかけさせる――。日本では1970年代からこんな光景が何世代にもわたり繰り返されてきました。

この元凶は、明治以降の教育制度にあります。学校のカリキュラムを修めるだけでは次のレベルの学校に進めないように設計されており、戦前の旧制中学・高校時代にも受け継がれました。

学校の授業だけでは満足に対応できないうえ、1回の入試結果で合否が決まってしまう。このため、かつては学校の先生たちが「入試対策」を自ら買って出て対応していました。この「対策」を民間が担うようになったのが、塾産業の始まりです。

中学から大学まで通底するこの入学試験観が温存されている背景に、進学塾の存在も大きいといえます。ただ、日本社会は塾で人生が決まる「塾歴社会」なのか、というと、そうではありません。

確かに東大や京大といった有名大学に入るのに、小学生の時から一部の進学塾に通ったことが「近道」になることもあるでしょう。でも、それが全てではありません。

いま塾がもてはやされる背景には、最近ドラマ化された「二月の勝者」や、大学入試を題材にした「ドラゴン桜」のヒットがあるのでしょう。ただ、受験競争物語が人気を集めるのは、人の能力を指標化し、数字を工夫して上げていくロールプレイングゲームのような面白さがあるからです。物語としての面白さと実際の受験は別の話です。

中学受験が過熱しているとされますが、一部の熱心な層を除けば、受験に関わる親の熱量は「周囲の親がやっているから、同じようにしなければ」程度ではないでしょうか。超難関校や有名塾の上位に入れるのはごく一部です。苛烈な競争に積極的に加わっているというより、子どもの未来に「保険」をかける感覚です。

でも保険は保証ではありません。有名塾にいたことは大学の入学歴と同じような意味は持たない。その意味で「塾歴」に実体はないのです。

塾歴信仰よりも、気がかりなのは、階層が固定化していると感じる子どもの増加です。「子ども時代の序列が生涯を通じて変わらない」と感じている。ある調査では世代間で比較すると、最近の若者世代は1世代前よりも「努力すれば報われる」と答える割合が大きく下がっています。

小学生の頃から大学受験を見すえて競い合う。都市部の中学受験は、日本社会全体から見れば、特殊な一部の争いです。社会に出てから大卒者の格差はさほど大きくありません。12歳の春の「勝ち負け」で決まる差は案外小さいということを忘れないでほしい。（聞き手・高久潤）

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.